

「博士漂流時代」出版から見えてきた課題

2011年10月14日 科学技術・学術審議会人材委員会
近畿大学医学部講師・サイエンス・サポート・アソシエーション代表 榎木英介



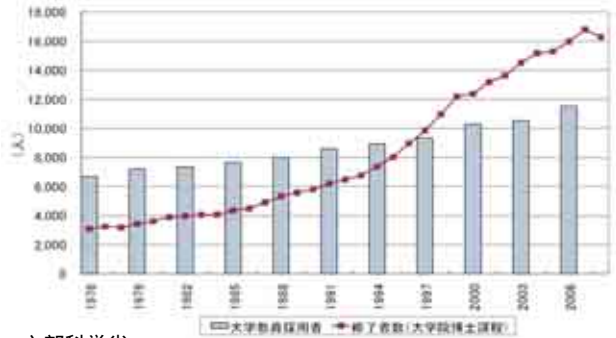
博士漂流時代
「余った博士」はどうか？
ディスカヴァー・トゥエンティワン
2010年11月出版 売上 3500部
東大生協本郷書籍部新書1位
科学ジャーナリスト賞2011受賞

読者の感想
問題点がよく分かった
そんなに昔から問題があったとは...
そんなにひどいとは思わなかった
悲観的なだけでなく、**希望**が持てた
もう少しがんばろうと思った

本の内容
基本的に公開されているデータを紹介
なのに「**はじめて知った**」という大学教員の
声があった
現状認識に乏しいのではないか？

当たり前だが博士全員が絶対に大学教員にはなれない
この認識さえ乏しいように感じる

ポスドク、院生の生の声
大学院の定員は減らすべき
当事者意識のない教員に失望
強い世代間不公平感
日本に失望



文部科学省
「知識基盤社会を牽引する人材の育成と活躍の促進に向けて」より

語られない論点
ポスドクは「**負け組**」なのか？
•「フェア」な競争がなされているのか？
•いまだ増え続けるポスドク ポスドクがいないと研究が進まない仕組みは問わないのか？
•世界各国でポスドク問題が存在するが、日本が世界最悪 (Nature2011年4月21日号) 年功序列、終身雇用など、社会の仕組みを無視して議論はできないのではないか？
•「能力」がない人をどうするか、という議論に**強い違和感**

提言
教員は当事者意識を持って
自らの経験や思い込みで語るな
「身銭」を切るべき
人材育成の費用、活躍の場がない
社会的損失を認識せよ
博士の育成は大学が独占
スポーツ選手やミュージシャンとは違う